

歴史的な大相場の入り口？ 景気サイクルに乗る投資 ①

2014年 7月 26日
日経 電子版

7月に入り日本株相場は上値が重い展開が続く。アベノミクス相場はもう賞味期限切れといった声もあるが、一方で今回の上げ相場は2020年あたりまで続く息の長いものになるとの指摘もある。景気サイクル、企業経営者の意識向上、長期投資家の台頭など、日本株の長い上昇を裏付ける要因が見え始めている。

「日本株は歴史的な大相場になる可能性がある。20年に日経平均株価が3万円になるような」。三菱UFJモルガン・スタンレー証券の嶋中雄二・景気循環研究所長は予想する。その根拠は、グラフAのように周期の異なる4つの景気波動が14年にそろって上向きとなるためだ。各波動はそれぞれ提唱した学者らの名にちなんで呼ばれる。

■2020年へ建設相次ぐ

4つの波が上向き、大きな転換点となるのは今回が3回目だ。

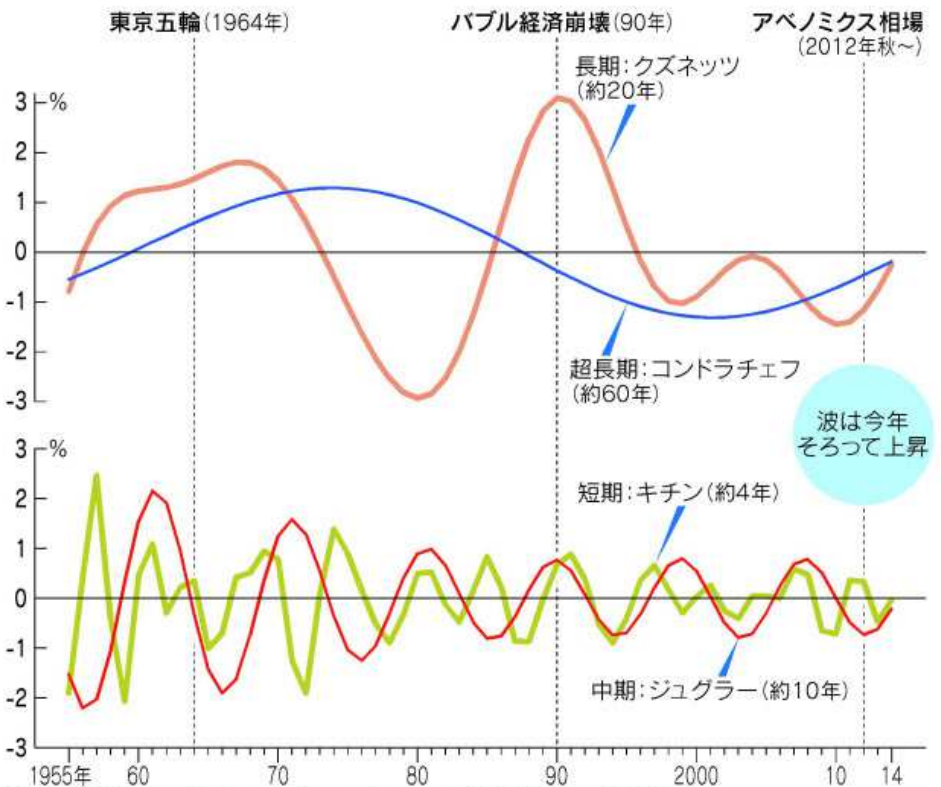
1回目は1904年。日露戦争、第1次世界大戦を経て、16年あたりまで景気が拡大した。

2回目は57年前後。神武景気、岩戸景気、東京五輪をはさんで67年のいざなぎ景気あたりまで続いた。

超長期の波は、道路や鉄道などインフラ関連投資のサイクルを示す。アベノミクス2本目の矢である機動的な財政出動により、50年ぶりに日本は本格的なインフラ整備に乗り出す。長期の波は住宅・商工業施設への投資に起因する。2020年に開かれる東京五輪に向け、マンションやオフィスビルなどの建設が続く。

企業の設備投資に基づく中期の波は、日本の経営者がようやく攻めの姿勢を取り戻し、国内で工場建設などに動き出したことを映す。さらに08年のリーマン・ショック後に続いてきた在庫調整も一巡。企業は在庫の積み増しに動き出し、短期の波も上向いてきた。

A 周期の異なる4つの「波」がそろって上昇(カッコ内は周期の目安)



(注) 各種資料より三菱UFJモルガン・スタンレー証券景気循環研究所が作成

B 2020年までに政府が目指す日本の姿

女性の活躍	指導的地位に占める女性の比率を30%程度に
外資の誘致	対日直接投資残高を倍の35兆円に 世界銀行のビジネス環境ランキングで先進国3位以内に
輸出の促進	インフラ輸出の受注額を3倍の30兆円に 農林水産物・食品の輸出額を12年の4500億円から1兆円に
その他	自動車や物流、宇宙関連など次世代インフラの市場規模を2兆円から16兆円に 黒字の中小企業・小規模事業者を70万社から140万社に

(注) 日本再興戦略などより

4つの投資サイクルが景気拡大を後押ししたのは米国でも同じ。黄金の1960年代と呼ばれたケネディ、ジョンソン大統領の時代や、80年代のレーガン政権の頃だ。日本のアベノミクスも「投資サイクルが重なるというマクロ経済の追い風があるから成功するだろう」(嶋中氏)。当然、株式相場にも支援材料になる。建設、不動産、道路、橋梁(きょうりょう)などの業種はもちろん、国内での設備投資を増やす自動車、工作機械も有望。

20年に向けては、女性の活躍を促したり海外から投資を呼び込んだりするために安倍政権が掲げる政策(表B)への関心も高い。